



「投資動向に関するアンケート」調査結果

<第7回調査>

2009年12月28日

【本調査の目的】

2009年6月の第1回調査を皮切りに、(株)外為どっとコムは、口座開設者のお客様を対象として、「投資動向等に関するアンケート調査」を毎月定期的を実施することになりました。本レポートは、同調査の結果に基づき、(株)外為どっとコム総合研究所がその一部を取りまとめるとい形で対外的に公表するものです。

近年の外国為替市場において、本邦の外国為替保証金取引への関心が強まっているのは周知の通りですが、その実像を把握するのに必要な統計データ等の整備は、既存のマクロ経済データや金融関連データなどに比べて、遅れているのが実情です。今後こうした調査を継続的に実施することで、時系列で比較した個人投資家層の相場感の変化や投資家属性別の投資動向の特徴などを精査し、当社の調査研究活動の深化につなげるとともに、その一部を社会に還元することが、本調査の目的です。

また、本調査におきましては、国内外の国政選挙など、市場参加者が注目する各種イベント前後の時期に、不定期のアンケート調査の結果も公表いたします。定点観測の調査結果と合わせて、ご参考にして頂ければ幸いです。

【調査実施期間】

2009年12月16日(水)13:00～2009年12月23日(水)13:00

※毎月中旬から下旬にかけての1週間を調査期間としています。

【調査対象】

(株)外為どっとコムの『ネクスト総合口座』、『FXトレード口座』のいずれか一方、または両方に口座を開設のお客様層

【調査方法】

(株)外為どっとコムの取引画面内にアンケートを公開。

今回の有効回答数は、6232件。

※必要項目を全て入力して回答して頂いたお客様を「有効回答数」としました。

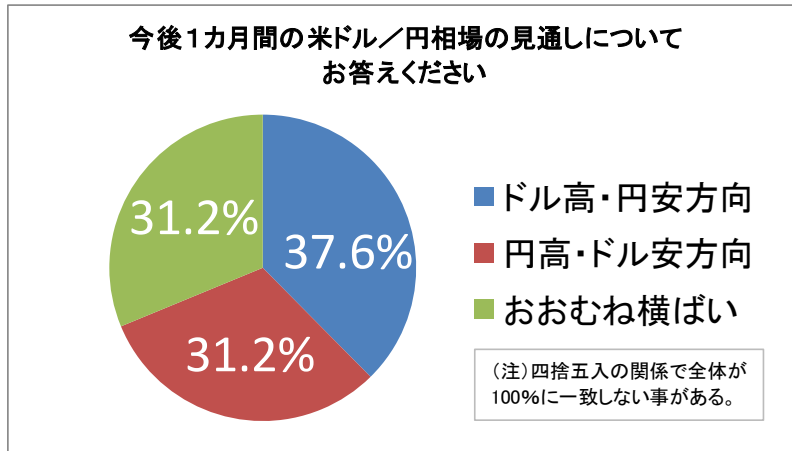
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2009 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

【第7回調査結果略報:ドル円予想DIは円安方向に転換】

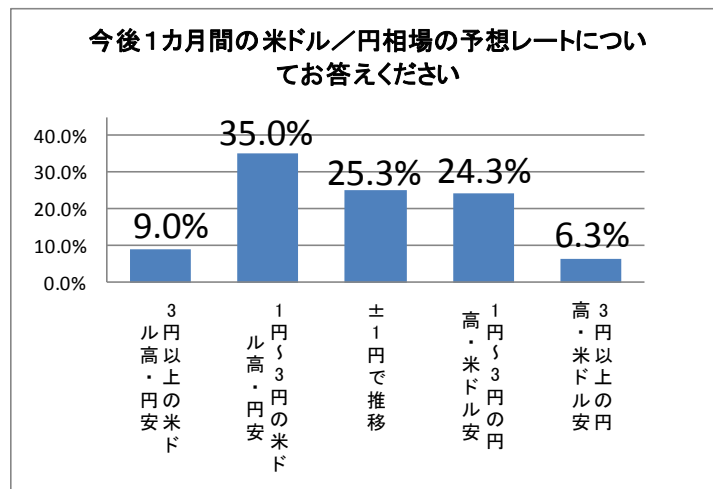
問1:今後1カ月間の米ドル/円相場の見通しについてお答えください

今後1カ月間のドル円相場見通しについては、「ドル高・円安方向」と答えた割合が37.6%であったのに対し、「円高・ドル安方向」と答えた割合が31.2%となった。この結果、「ドル円予想DI」は+6.4%ポイントと、前回の▲18.9%ポイントから一転してドル高方向に変化した。調査期間中のドル/円相場が89円台から91円台に向けて円安基調で推移していたが、夏場以降のDIの推移をみると、8月調査がドル高、9月が円高、10月がドル高、11月が円高、12月がドル高と転変が激しいのが特徴だ。安定的な方向感の形成に苦労している個人投資家の姿が浮き彫りになって



問2:今後1カ月間の米ドル/円相場の予想レートについてお答えください

今後1カ月間のドル円相場の予想レートについては、「1円～3円程度のドル高・円安」と答えた割合が35.0%と最も多く、「±1円以内」が25.3%、「1円～3円程度のドル安・円高」予想が24.3%、「3円以上のドル高」が9.0%、「3円以上の円高」が6.3%の順番になった。ヒストグラムの形状は、円高側にピークがあった先月からは一転して円安側にシフトした格好になっており、問1に示された回答結果とおおむね整合的であると言える。比較的機動的に相場見通しを入れ替えるFX投資家層の特徴が良く表れた動きだったと言える。

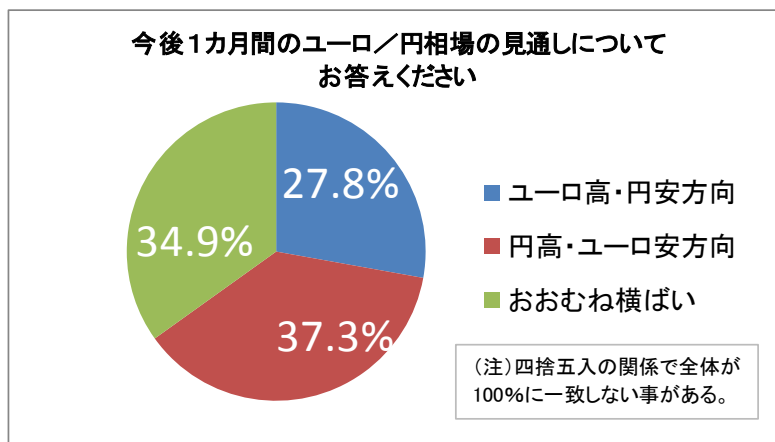


本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2009 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

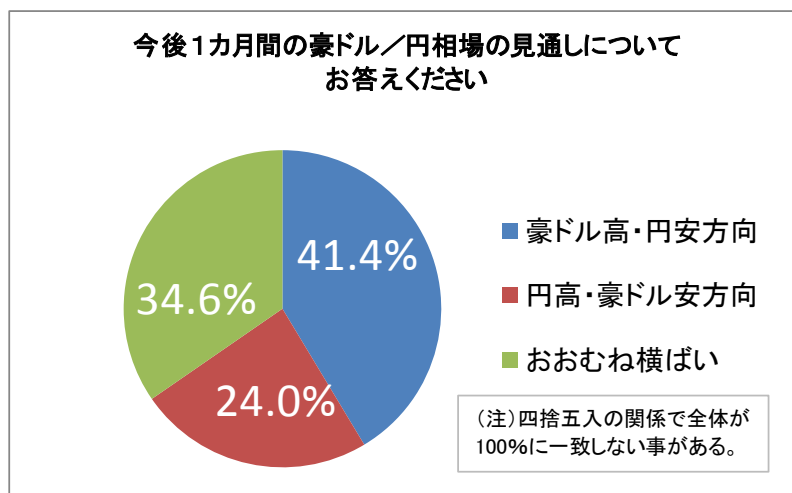
問3: 今後1か月間のユーロ／円相場の見通しについてお答えください

今後1か月間のユーロ円相場見通しについては、「ユーロ高・円安方向」と答えた割合が27.8%であったのに対し、「円高・ユーロ安方向」と答えた割合が37.3%となった。この結果、「ユーロ円予想DI」は▲9.5%ポイントと、前回調査の+3.9%ポイントから一転してユーロ安予想に変化した。調査期間内のユーロ円相場は、127~131円台で出入りの激しい展開だったが、欧州系銀行の経営不安やギリシャ国債格下げの影響もあり、FX投資家層はユーロ弱気に傾いたようだ。なお、調査開始以来ユーロ円予想DIがユーロ安方向を示したのは今回が初めての現象である。



問4: 今後1か月間の豪ドル／円相場の見通しについてお答えください

今後1か月間の豪ドル円相場見通しについては、「豪ドル高・円安方向」と答えた割合が41.4%であったのに対し、「円高・豪ドル安方向」と答えた割合が24.0%となった。この結果、「豪ドル円予想DI」は+17.4%ポイントと、前回調査の+19.1%ポイントから小幅ながら低下した。調査期間中の豪ドル円相場は81円台から78円台に急落後80円台を回復という忙しい展開だったが、個人投資家層の豪ドルへの相場観はあまり変化しなかった。ただし、豪ドル予想DIは調査開始以来常に二桁のプラスを維持しており、根強い強気派の存在が示唆されている。



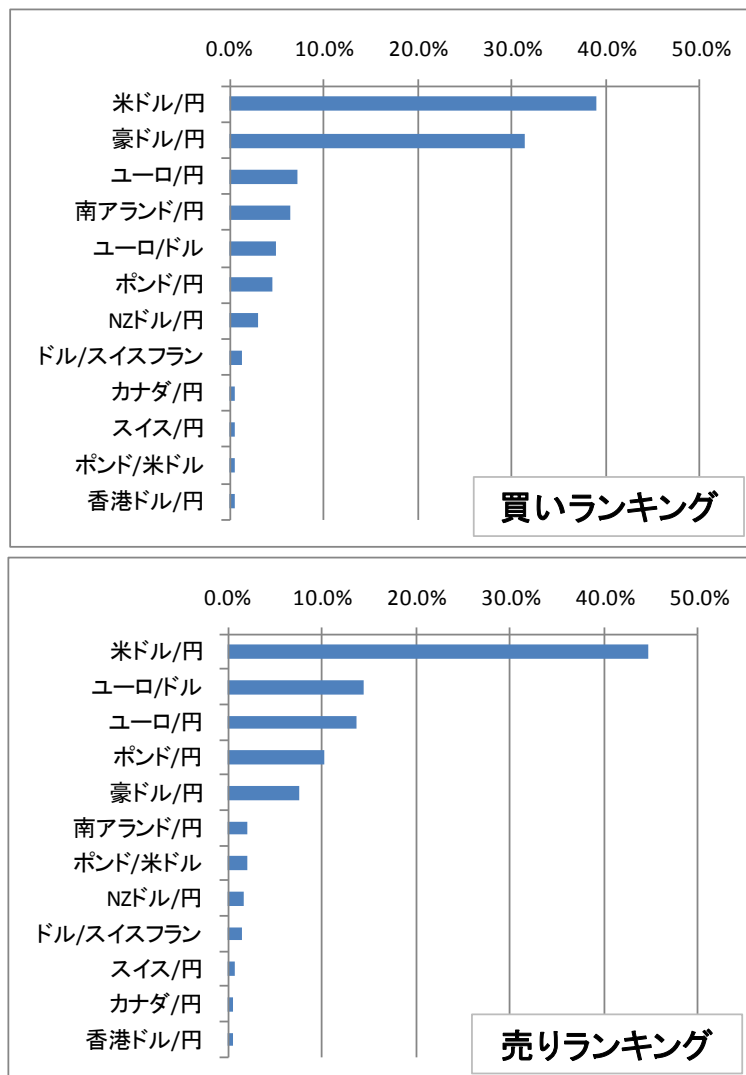
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2009 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

問5: 今後、注目の通貨ペアについてお答えください

今後注目している通貨ペアについて尋ねたところ、「買い」で注目されている通貨ペアは、1位米ドル円(38.9%)、2位豪ドル円(31.5%)と前回と順位が交代した。以下、3位ユーロ円(7.1%)、4位南アランド円(6.4%)、5位ユーロドル(5.0%)の順となっている。一方、「売り」で注目されている通貨ペアは、1位が断突で米ドル円(44.7%)となっており、以下、2位ユーロドル(14.6%)、3位ユーロ円(13.7%)、4位ポンド円(10.3%)、5位豪ドル円(7.7%)の順で続いている。

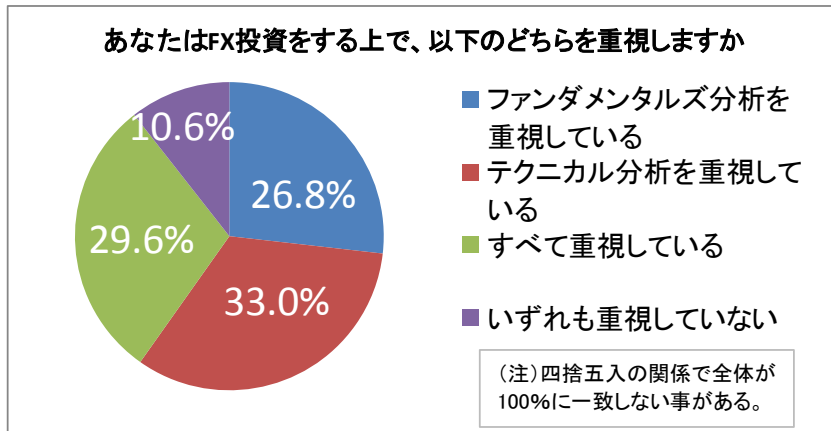
米ドル円は買いでも売りでも注目される通貨の地位を維持しており、入手可能な情報量の多さなどから、強気/弱気の相場観とは無関係の「売買の対象」として見た場合、最も人気の高い通貨になっている。一方、「買い」注目度で常に上位に位置する豪ドル円は、「売り」での注目度が相対的に低いという特徴があり、やはり金利の高さが影響しているようだ。なお、今回調査ではユーロドル、ユーロ円、ポンド円などの欧州通貨の売りでの順位が上昇したことが特徴になっている。ドバイ問題発覚後相次いだ欧州系銀行の経営不安がここにも投影されているようだ。



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

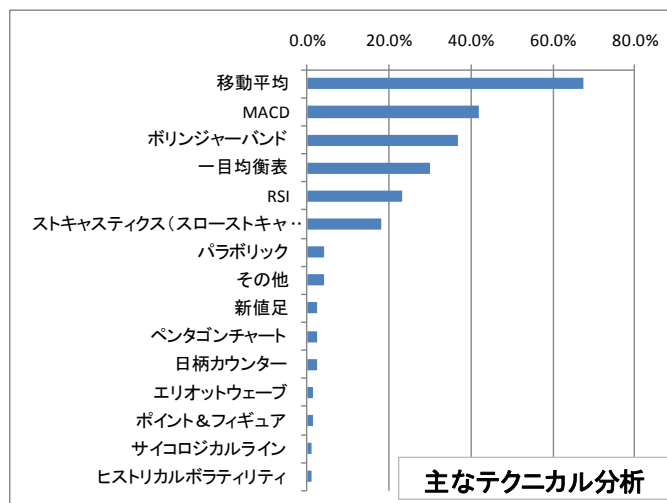
問6: あなたはFX投資をする上で、以下のどちらを重視しますか?

「FX投資の際に重視する分析手法」については、「ファンダメンタルズ分析を重視する」と答えた割合が26.8%であったのに対し、「テクニカル分析を重視する」と答えた割合が33.0%と、相変わらずテクニカル分析を重視する投資家の割合の方が高かった。「すべて重視している」との回答割合が29.6%、「どちらも重視していない」が10.6%であった。調査開始以来、回答割合に顕著な変化は生じていない。FX投資家の分析手法の好みは相場環境に左右され難いと言える。



問7: テクニカル分析では何を主に活用していますか?

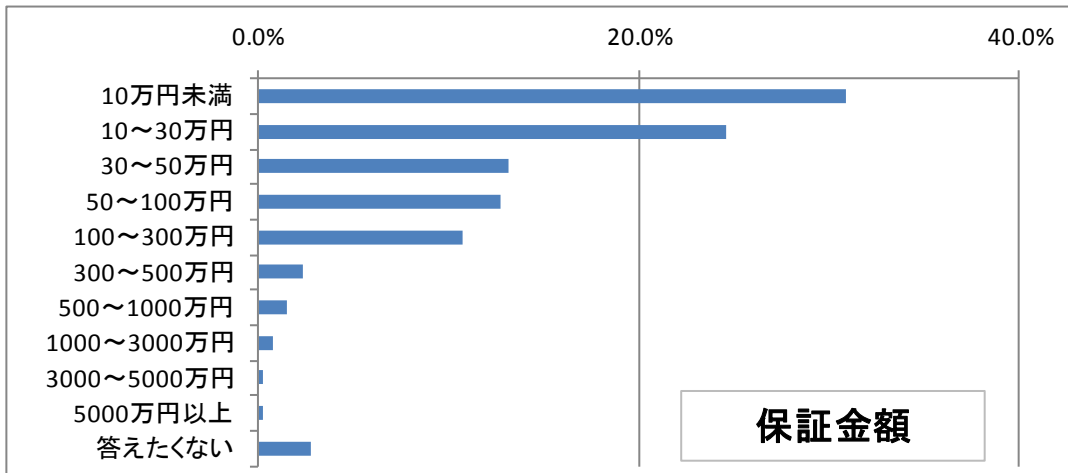
「テクニカル分析で主として活用している手法」について複数回答可として尋ねたところ、「移動平均(67.3%)」が最も高く、「MACD(42.0%)」、「ボリンジャーバンド(36.7%)」、「一目均衡表(30.0%)」、「RSI(23.3%)」、「ストキャスティクス(18.0%)」の順番で並んでいる。個人投資家の人気テクニカル分析手法の順位はあまり変わらず、今回も一番人気は移動平均分析だった。テクニカル分析の手法を、いわゆる「トレンド系」と「逆張り系」に分けてみた場合、移動平均やMACDなどのトレンド系の人気が相対的に高い一方で、ボリンジャーバンドやRSIなどの逆張り系への注目度も高く、様々な手法を駆使して相場に臨む個人投資家の姿勢が投影されている。



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

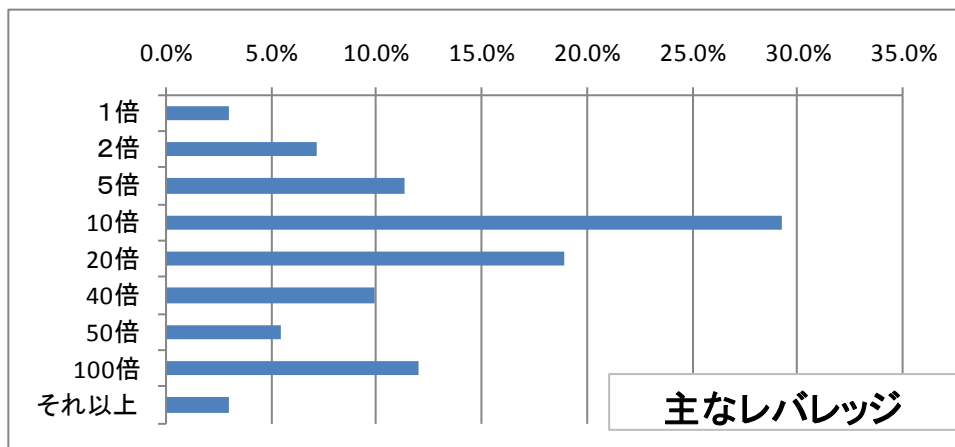
問8: FX取引の際の保証金の額についてお答えください

「FX取引の際の保証金の額」について尋ねたところ、10万円未満と答えた割合(30.9%)が最も多く、10~30万円(24.6%)が2番目に多かった。回答者の過半数以上は、30万円以下に分布しているのが特徴だ。以下、第3位が30~50万円(13.2%)、4位が50~100万円(12.8%)、5位が100~300万円(10.8%)となっている。回答割合の順番は、基本的に保証金額の大きさと綺麗な反比例の関係にある。不特定多数の小口投資家に分散しているFX投資家層のすそ野の広さを再確認させる内容になっていると言える。



問9: FX投資の際、主に何倍のレバレッジを活用していますか？

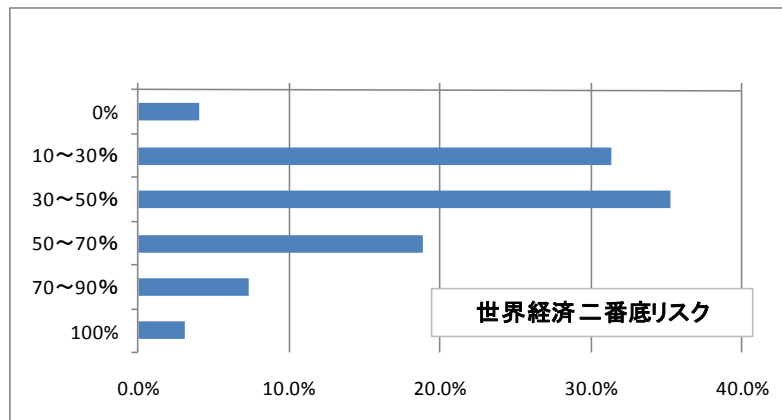
FX投資の際に主として活用しているレバレッジについて尋ねたところ、10倍と答えた割合(29.2%)が最も多く、20倍(19.0%)が2番目に多かった。これに次ぐ3位が100倍であったが、その比率は12.0%であり、「それ(100倍)以上」と答えた3.0%を合わせて15.0%であった。外国為替保証金取引について、高レバレッジの投資家層の「武勇伝」が一部の媒体で喧伝されることもあるが、今回のアンケート調査に答えた個人投資家の約7割は20倍以下の倍率を主として活用している。上記問8の回答結果と合わせ、比較的堅実なFX取引の実態が示唆されている。



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

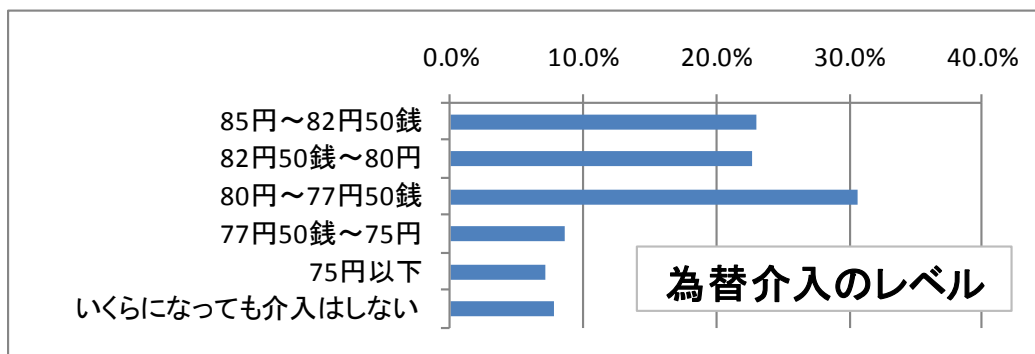
問10: 世界景気が2番底に陥る確率・・・

今月の特別質問項目として、「2010年以降の世界経済の行方について、世界経済が2番底に陥る確率を選んでください。またそのきっかけとなると考えられる出来事があればお書き下さい」と尋ねたところ、「30~50%」が35.3%で最大だった。「10~30%」と答えた31.4%、「0~10%」と答えた4.1%を合わせると、7割以上の回答者約50%以下の確率と考えており、メインシナリオは世界景気回復を見ている投資家が多いと言える。ちなみに、「きっかけとなる出来事」についての回答をみると、経済対策息切れ後の米国経済への不安やドバイショックをきっかけとした信用不安問題の拡散、世界的なデフレ圧力の拡がりなどを挙げる向きが、多かった。



問11: 日本政府・日銀が円売りドル買い介入を行う場合の水準は？

今月の特別質問項目として、「日本政府・日銀が円売りドル買い介入を行うとしたら、次のうちの水準だと思われますか」と尋ねたところ、「80円~77円50銭」と答えた割合30.6%で最大だった。以下、「85円~82円50銭」が23.0%、「82円50銭~80円」が22.7%、「77円50銭~75円」が8.6%、「75円以下」が7.2%の順番で続いている。なお、「いくらになっても介入はしない」と答えた比率も7.9%であった。80円割れの水準と見る向きが全体の45%以上に達しているが、85円~80円の水準と見る向きも約45%であり、概ね85円割れを介入発動の警戒水域と見る向きが多いようだ。11月下旬にドル円相場が1ドル=85円割れまで急落する前後において本邦政府要人からの口先為替介入が頻発し始めたことなどを反映した結果であると言えるだろう。



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2009 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

【今後の調査実施計画及び公表方針】

本調査も第7回目となりました。前月との対比での時系列比較は徐々に可能になり始めていますが、まだ開始後1年未満ということもあり、前年同期との比較に十分な調査結果の蓄積は進んでおりません。このため、現時点では統計分析に深みを持たせるために必要不可欠な長期間の時系列比較を提示することはまだできませんが、今後、毎月定点観測で実施する調査結果の蓄積が進むにつれて、DIの時系列比較等から見出せるFX投資家の相場観の変化やその傾向などの把握も可能になってくることが期待されます。

毎月の本調査においては、公表扱いとしている質問項目及び回答結果の他に、「投資家の属性」、「取引頻度」、「取引規模」、「取引時間帯」、「投資選好」など、投資家実態を把握するために必要な各種の質問項目も設けて集計しています。それらの回答結果を用いた投資家の実態報告や属性別のクロス・セクション分析等については、当研究所が1年に1回、毎年春先以降に公表する「年次白書」で紹介する予定です。

【付表：主要3通貨ペア予想DIの推移】

		米ドル／円			ユーロ／円			豪ドル／円		
		米ドル高	米ドル安	DI	ユーロ高	ユーロ安	DI	豪ドル高	豪ドル安	DI
2009年	6月	21.0	35.2	-14.2	38.4	27.2	11.2	48.8	23.7	25.1
	7月	34.6	33.6	1.0	40.2	28.2	12.0	45.5	26.3	19.2
	8月	36.3	30.3	6.0	41.8	27.3	14.5	50.7	23.3	27.4
	9月	32.1	41.3	-9.2	38.0	23.5	14.5	45.1	21.1	24.0
	10月	45.5	24.7	20.8	51.1	17.4	33.7	60.5	15.4	45.1
	11月	22.9	41.8	-18.9	33.6	29.7	3.9	44.6	25.5	19.1
	12月	37.6	31.2	6.4	27.8	37.3	-9.5	41.4	24.0	17.4
2010年	1月									
	2月									
	3月									
	4月									
	5月									
	6月									
	7月									
	8月									
	9月									
	10月									
	11月									
	12月									
	1月									
2月										
3月										

(出所)外為どっとコム総合研究所

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2009 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com